春宮○恒貞親王御盃ヲ傾サセ給ケル時、島寺ノ袖ト云ケル遊君、御酌ニ立タリケルガ、拍子ヲ打テ、翠帳紅閨萬事之禮法雖異、舟中波上一生之歡會是同ト、時ノ調子ノ眞中ヲ、三重ニシボリ歌ヒタリケレバ、儲君儲王忝モ叡感ノ御心ヲ被傾、

〔近世畸人傳三〕傾城吉野　井灰屋某　銀冶某　僧日徑

都島原の廓によしのといへる名妓あり、容色風姿類なきのみならず、手かき歌よみ、茶香などをはじめ、凡遊藝に長じぬ、もとより心たかく、なみ〳〵の衣類器財などは省だにせず、それが著たる廣東島のうはおそひを、よしの廣東と名付て、今も賞茶者流の袋物にして、もてなすにてもしるべし、○下略

〔瀨田問答〕新吉原三浦屋遊女高尾六代程モ續キ候哉、初代ヨリノ傳イカヾ、

答○瀨田貞雄　高尾ガ傳ハ、ヨク原武太夫盛和委敷候ヒキ、傳ヘ請候筈ニテ終ニ不果、殘念ニ候、淺草山谷寺町春慶院ニ轉譽妙身ト有之碑、萬治二己亥年十二月五日ト切テ、辭世ニ、サム風ニモロクモクチル紅葉哉、トアリ、塔ノ屋根（紋）此紋切付タル四面塔ノ碑ハ、全ク初代ノ高尾ニ候、是ヲ土手ノ道哲ニテ似セ碑ヲ造リ、二代目高尾ト稱シ、人ヲ欺キシヲ不吟味ニテ、江戸砂子ニ二代目ト記シ候ナリ、

〔近世奇跡考四〕三浦高尾考

寛永二十年印本吾妻物語元吉原細見記を見るに、元吉原の時代、高尾といふ妓女四人あり、江戸町善右衞門内高尾、同町甚左衞門内高尾、京町若三郎内高尾、同町九郎右衞門内高尾、以上、みなはし女郎にて、もとより三浦の高尾にあらず、その以前高尾といふ名妓あらば、四人まではし女郎の名によぶべしともおぼえず、三浦の初代高尾は、寛永の後いできたる事あきらけし、今杏園先生の高尾考にもとづき、古書を參考して年序をさだめ、好事家の考訂をまつのみ、